

子規自筆の根岸地図

寺田寅彦

青空文庫

子規の自筆を二つ持っている。その一つは端書はがきで「今朝ハ失敬、

今日午後四時頃夏目来訪只今（九時）帰申候。寓所ハ牛込やらいち矢来
町三番地よう字中ノ丸丙六〇号」とある。片仮名は三字だけである。

「四時頃」の三字はあとから行の右側へ書き入れになっている。

表面には「駒込にしかたまち西片町十番地いノ十六 寺田寅彦殿 上根岸かみねぎし

八十二 正岡常規つねのり」とあり、消印は「武蔵東京下谷したや 卅三年七

月二十四日イ便」となっている。これは、夏目先生が英国へ留学を命ぜられたために熊本を引上げて上京し、奥さんのおさとの中根氏の寓居にひと先ず落着かれたときのことであるらしい。先生が上京した事をわざわざ知らしてくれたものと思われる。その頃

自分は大学二年生であつたが、その少し前に郷里から妻を呼びよせて西片町に家をもつていたのである。

「今日」とあるのは七月二十三日だろうと思われるのは消印が二十四日のイ便であるのに「只今（九時）帰申候」とあるからである。夏目先生が帰つてからすぐに筆をとつてこの端書をかき、そうして、おそらくすぐに令妹律子さんに渡してポストに入れさせたのではないかとも想像される。それが最後の集便時刻を過ぎていたので消印が翌日の日附になつたものであろう。

それはとにかく「四時」「九時」と時刻を克明に書いている所に何となく自分の頭にある子規という人が出ているような気がする。そうかと思うと日附は書いてないのも何となく面白い。

配達局の消印も明瞭で駒込局の口便になっている。一体にその頃の消印ははつきりしていたが、近頃のは捺し方がぞんざいで不明なのが多いような気がする。こんな些末なところにも現代の慌だしさが出ているかもしれないと思われる。

もう一つの子規自筆の記念品は、子規の家から中村不折ふせつの家に行く道筋を自分に教えるために描いてくれた地図である。子規常用の唐紙に朱しゆけい 罫いを劃した二十四字十八行詰の原稿紙いっぱいにかいたものである。紙の左上から右辺の中ほどまで二条の並行曲線が引いてあるのが上野の麓を通る鉄道線路を示している。その線路の右端の下方、すなわち紙の右下隅に鶯うぐいすよこちよう 横 町 の 彎わんきよ 曲くした道があつて、その片側にいびつな長方形のかいてあるの

がすなわち子規庵の所在を示すらしい。紙の右半はそれだけであとは空白であるが、左半の方にはややゴタゴタ入り組んだ街路がかいてある。不折の家は二つ並んだ袋町ふくろまちの一方のいちばん奥にあつて「上根岸四十番不折」としてある。隣の袋町に○印をして「浅井」とあるのは浅井忠氏ちゆうの家であろう。この袋町への入口の両脇に「ユヤ」「床屋」としてある。この界隈かいわいの右方に鳥居をかけた「三島神社」とある。それから下の方へ下がった道脇に「正門」とあるのはたぶん前田邸の正門の意味かと思われる。

もちろん仰向けに寝ていて描いたのだと思うがなかなか威勢のいい地図で、また頭のいい地図である。その頃はもう寝たきりで動けなくなっていた子規が頭の中で根岸の町を歩いて画いてくれ

た図だと思ふと特別に面白いような気がする。

表装でもしておくといふと思ひながらそのままに、色々な古手紙と一しよに突込んであつたのを、近頃見せたい人があつて捜し出して書齋の机の抽斗ひきだしに入れてある。せめて状袋にでも入れて「正岡子規自筆根岸地図」とでも誌しるしておかないと自分が死んだあとでは、紙屑になつてしまふだらうと思ふ。

こんな事を書いていたら、急に三十年來行つたことのない鶯横町へ行つてみたくなつた。日曜の午後やなかに谷中へ行つてみると寛永寺坂に地下鉄の停車場が出来たりしてだ**い**昔と様子がちがつている。昔の御院殿坂を捜して墓地の中を歩いてゐるうちに鉄道線

路へ出たがどもう見覚えがない。陸橋を渡るとそこらの家の表札は日暮里にっぽりとなつてゐる。昨日の雨でぐじやぐじやになつた新開街路を歩いてゐるとラジオドラマの放送の声がついて来る。上根岸百何番とあるからこの辺かと思うが何一つ昔の見覚えのあるものはない。昔の根岸はもうとうに亡くなつてしまつてゐる。鶯横町も消えているのではないかという気がして心細くなつて来た。とある横町を這入つて行くと左側にシャボテンを売る店があつた。もう少し行くと路地の角の塀に掛けた居住者姓名札の中に「寒川陽光」とあるのが突然眼についた。そのすぐ向う側に寒川氏の家があつて、その隣が子規庵である。表札を見ると間違ひはないのであるが、どういふものか三十年前の記憶とだいぶちがうような

気がする。門も板塀も昔の方が今のより古くさびていたように思われ、それから門から玄関までの距離が昔はもつと遠かったような気がする。もちろん思い違いかもしれない。ただ向う側の割竹を並べた垣の上に鬱蒼と茂つて路地の上に蔽いかぶさっているしい椎の木らしいものだけが昔のままのように見える。人間よりも家屋よりもこうした樹の方が年を取らぬものと思われる。とにかくこの樹の茂りを見てはじめて三十年前の鶯横町を取返したような気がした。

帰りにはやっぱり御院殿の坂が見付かった。どこか昔の姿が残っているが昔のこんもりした感じはもうない。

鶯横町の椎の茂りを見ただけで満足してそのまま帰って来てよ

かったような気がする。三十年前の錯覚だらけの記憶をそのまま大事にそつとしておくのも悪くはないと思うのである。

帰ってから現在の東京の地図を出して上根岸の部分を物色したが、図が不正確なせいもか鶯横町も分らないし、子規自筆地図にある二つの袋町も見えない。ことによるとちようどその辺を今電車が走っているのかもしれないのである。

（昭和九年八月『東炎』）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一卷」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第五卷」岩波書店

1985（昭和60）年12月5日第2刷発行

初出：「東炎 第三卷第八号」

1934（昭和9）年8月発行

入力：Nana ohbe

校正：松永正敏

2004年3月24日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

子規自筆の根岸地図

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>